

第2章

最近50年のあゆみ

最近50年のあゆみについて

町並 陸生



「1910年（明治43年）4月の大阪に於ける第3回日本医学会の一分科（第3部会）として開催された「病理学部会」は、数年来の懸案であった「日本病理学会」の創設を満場一致を以て可決し、翌44年4月東京に於てその第1回総会を開催されることになった」との記述が東京帝国大学病理学教室五十年史に見られる。また、日本病理学会50年史によれば、第一回日本病理学会総会は1911年（明治44年）4月5、6日に東京帝国大学病理学教室講堂で開催され、会長 山極勝三郎、副会長 桂田富士郎、編集幹事 今 裕、川村麟也、会計主任幹事 長與又郎、宿題報告題目：日本住血吸虫病、担当 病理解剖方面・藤浪 鑑、臨床的方面・土屋岩保、動物学的方面・桂田富士郎となっており、会員204名、演説と示説併せて47題であった。その後、会員数及び演題数は増加していった。しかし、第二次世界大戦末期の昭和19年（1944年）には、京都での第34回総会が計画されたが中止となり、終戦の年（昭和20年、1945年）には総会は計画されなかった。従って2011年4月の総会が第100回となり、日本病理学会創設後102年目を迎えることになる。

第50回日本病理学会総会は1961年（昭和36年）4月1日から4日に東京で開催され、世話機関 東京大学、会長 吉田富三、副会長 三宅 仁、会員1,984名、演説と示説併せて286題であった。50年の間に会員数が約10倍、演題数が約6倍に増加した。第100回日本病理学会総会は2011年（平成23年）4月28日から30日に横浜で開催される予定で、世話機関 東京大学、会長 深山正久、演題数は1,086であるが、第99回日本病理学会総会時の会員数は4019、一般演題数は演説と示説併せて1,029題であった。従って、最近の50年間に会員数が約2倍、演題数が3倍となった。第1回総会時に比べると会員数及び演題数が何れも約20倍に増加した。

第1回から第100回の日本病理学会総会までの会期、開催地、会長、副会長、会長所属機関、会員数及び演題数を総会一覧として示した（表1、表2）。明治、大正、昭和の時代には、会長を山極勝三郎が4回、長與又郎が3回、藤浪 鑑、草間 滋及び三田村篤志郎が各2回と複数回会長を務めている。第36回総会（1947年、昭和22年）以降は会長を複数回務めたものはいない。また、前述の通り、第34回総会（1944年、昭和19年）は開催地、会長、副会長が決まっていたが、第二次世界大戦の末期で中止になった。終戦の年、1945年、昭和20年は総会の予定すらなかった。終戦後は1946年、昭和21年、第35回総会から再

開され今日に至った。

会員数は多少の増減を繰り返しながら、着実に増加してきたが、第 87 回総会の年(1998 年、平成 10 年)の 4,276 名を頂点としてやや減少傾向にあり、前述の通り、第 99 回総会の年(2010 年、平成 22 年)は 4,089 名となった(表 2)。

また、総会の一般演題数の推移については表 2 の通りで、多少の増減を繰り返しながら着実に増加し、前述のように第 50 回総会時に 286 題であった演題数が第 87 回総会時(1998 年、平成 10 年)では歴史上最も多い 1,288 題となり、その後はやや減少し、第 99 回総会では 1,029 題となった。

第 1 回日本病理学会総会から、一般演題に加えて宿題報告が学会の重要な部分を占めてきた。初期の学会では宿題報告は感染症などの学会当時に最も問題となっていた疾病についての報告が主であったが、最近では特定の病理学会のライフワークを紹介する性格のものに変わってきた感がある。長年にわたり宿題選考委員会の推薦により宿題報告担当者が決定されてきたが、最近では宿題報告も応募のかたちをとることになった。宿題報告に関しては各論的記述が後にあるので、ここでは第 51 回総会から第 100 回総会までの演者と演題の一覧表を提示するに止める(表 3)。

年 1 回の春の総会に加えて、1950 年(昭和 25 年)から 1954 年(昭和 29 年)まで 5 年間、秋に東と西に地方会が開催されたが、1955 年(昭和 30 年)からは日本病理学会秋期特別総会として統一され、総会が春と秋の 2 回になって今日に至っている。秋期特別総会は交通の便などの関係で、第 1 回から第 41 回(1995 年、平成 7 年)までは東京で開催されてきたが、第 42 回(1996 年、平成 8 年)は沖縄日本復帰 25 周年の年でもあり、初めて東京を離れ、沖縄県那覇市で琉球大学、岩政輝男代表世話人の下で開催された。それ以後、1 年おきに東京を離れることになった。第 1 回(1955 年、昭和 30 年)から第 56 回(2010 年、平成 22 年)までの秋期特別総会の開催地、世話人、世話機関を一覧表で示した(表 4)。秋期特別総会には会長を置かず、会場その他、学会の世話を担当する機関と代表者を世話機関および世話人と呼んできたが、平成 19 年(2007 年)の第 53 回秋期特別総会より、代表世話人を会長と呼ぶことになった。

この間、日本病理学会会誌が年 1 回、春の総会の記録として刊行されてきたが、1951 年(昭和 26 年)より会誌に加えて欧文誌(英文誌) *Acta Pathologica Japonica* が刊行され、1994 年(平成 6 年)には、当時の下里幸雄編集幹事の下で、その名が *Pathology International* に変更され、出版社も笹氣出版印刷からオーストラリアの blackwell 出版に変わった。

一方、日本病理学会の運営は長年にわたり、総務幹事、会計幹事、編集幹事の 3 幹事制をとり、総務幹事が日本病理学会を代表してきたが、平成 12 年(2000 年)の社団法人化に向けて、1997 年(平成 9 年)に幹事制は廃止され理事長制となった。第 51 回日本病理

学会総会から今日までの総務，会計，編集の3幹事および法人化に伴う理事長および副理事長を一覧表にして示した（表5）。

日本病理学会は設立以来，任意団体として活動してきたが，会員数4,000名を越え，国際的な英文誌「Pathology International」や昭和33年（1958年）から毎年刊行されている世界に例を見ない貴重な資料「日本病理剖検輯報」の出版，また，昭和54年（1979年）に発足した病理専門医の認定などがあり，平成元年（1989年）頃より，これらの業務を行う日本病理学会は法人格を有する団体であることが望ましいとの考えが学会内部に徐々に育ち始めた。将来構想委員会が平成6年（1994年）に発足して検討した結果，日本病理学会は公益法人として活動することが望ましく，公益法人には財団法人と社団法人があり，学会は文部省管轄の社団法人となるのが適切であるとの結論に至り，同年11月の評議員会で法人化の決定がなされ，櫻井 勇委員長の下に法人化準備委員会が発足した。平成8年（1996年）に筑波大学事務局から海老沢達也氏を日本病理学会事務局長に迎え社団法人に向けての準備に入った。社団法人化にあたっては，日本病理学会の伝統である総務，会計，編集の三幹事制を廃止し，理事長制にする必要があり，また，最高決議機関は評議員会から総会に変更する必要が生じた。これに先立ち，平成8年（1996年）4月の長年，東京大学医学部病理学教室内にあった日本病理学会事務所を本郷三丁目のビル内に移転させた。

平成8年4月の評議員会で法人化準備委員会が作成した定款原案が承認され，平成9年（1997年）4月の評議員会での定款改正の承認，そして平成10年（1998年）8月の社団法人日本病理学会設立総会で田原榮一議長の下に社団法人化が決議され，平成11年（1999年）1月7日付けで有馬朗人文部大臣から社団法人日本病理学会の設立が許可された（図1）。

日本病理学会の社団法人化にあたり，その最も大きな動機となったのは昭和53年（1978年）に発足した認定病理医制度である。認定病理医制度はその後，平成15年（2003年）に名称が病理専門医制度に改められた。1979年3月の第1回認定から1983年1月の第5回認定までは資格審査のみで1,139名が認定され，1983年8月の第6回認定からは試験による認定が行われ，毎年30名から80名が認定されてきた。病理認定医数は平成20年（2008年）及び21年（2009年）

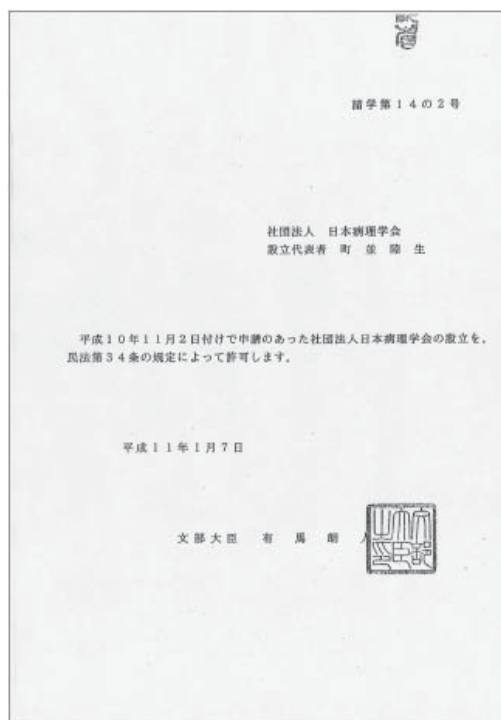


図1

に2,053名と最も多くなったが、その後は減少し、平成22年(2010年)には2,027名に減少した。また、歯科医師を対象とした口腔病理認定医制度も昭和63年(1988年)に発足し、その後、名称が口腔病理専門医制度に改められたが、平成元年(1989年)の第1回の認定から今日まで毎年3名から10名程度の専門医の認定が行われ、平成22年(2010年)現在、日本病理学会口腔病理専門医は104名となっている。認定病理医制度の発足に伴い、日本病理学会は病理医の研修施設として認定施設(認定病院)及び登録施設(登録病院)の認定も行ってきた。平成22年現在、認定施設数が486、登録施設数が224である。

日本病理学会認定病理医は平成6年(1994年)より日本医師会、日本医学会及び学会認定医制協議会の三者による承認が行われる様になった。更に平成15年(2003年)2月24日に厚生労働省により各都道府県宛の通知で、日本病理学会認定病理医は病理専門医という名前で広告可能となり、認定病理医の名称が病理専門医に変更された。この際、専門医資格を認定する団体の基準として法人であることが必要であり、平成12年の日本病理学会の社団法人化が大きな役割を果たした。医師は医師法により2年に一度、住所或いは従事先の所在地を管轄する保健所長に医師届出票の提出が義務付けられているが、病理専門医の広告が可能となったので、平成18年度からは医師届出票に「病理」という項目が追加され、長年、「その他」の項目の中の一つとして扱われていた病理医が、初めて世の中で認知された。

我が国の病理学は大学医学部(医科大学)の基礎講座の一つとして位置付けられ発展してきたため、日常の医療の中で病理学がどのような役割を果たしているかについて、医療関係者の中でも意外に理解されていないことが多い。欧米諸国では、我が国の事情とは違って、病理学が極めて自然に診療体系の中に組み込まれており、特にアメリカでは、70年以上も前に内科と同時に病理専門医制度が制定され、診療科の一つとして目覚ましい発展を遂げ現在に至っている。上記の様に、日本病理学会は能力の優れた病理医を育成し認定するために、昭和53年(1978年)に認定病理医制度を発足させ、現在までに2,807名の病理専門医を認定してきた。このよう

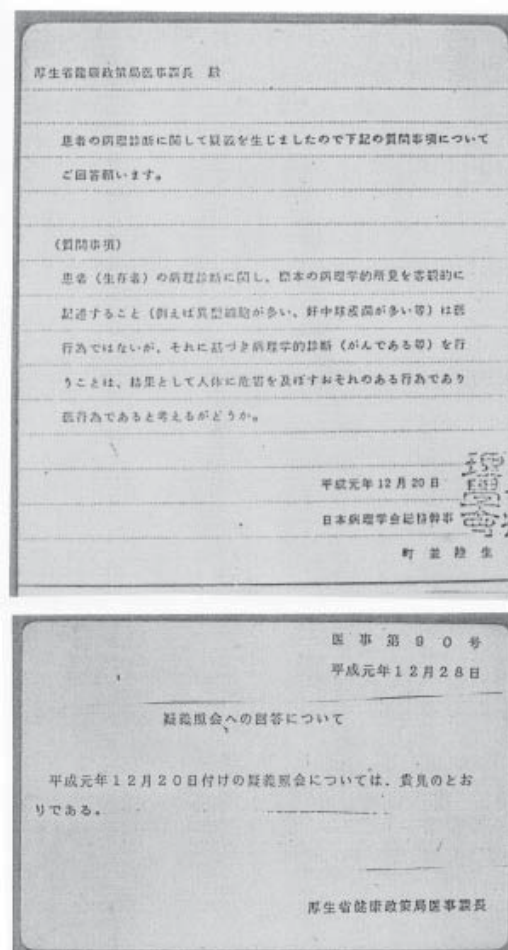


図2

にして認定された病理専門医が、診療体系の中で十分活動して行くための明確な基盤が与えられることを願って、病理科が診療標榜科として認められるよう昭和63年（1988年）に石河利隆委員長の下に病理科標榜専門委員会が発足した。病理科標榜専門委員会では病理診断が医行為であることを明確にすることが、病理科の標榜に当たって先ず第一に必要なことであるとの結論に達し、平成元年（1989年）12月20日付けで厚生省健康政策局医事課長宛に疑義照会を行い、病理所見を記述することは医行為ではないが、病学的診断を行うことは医行為であるとの回答を得た（図2）。これを元に日本病理学会は厚生省に病理科の標榜を要望し、平成8年（1996年）の医道審議会でも病理科標榜が検討されたが、「保留」となった。そして平成20年（2008年）の医療法の改正で病理科標榜が「病理診断科」という名の診療標榜科として国から認められ、広告できることとなった。病理科標榜専門委員会の発足から実現までに実に20年の歳月が流れた。これに伴い平成20年度の医師届出表には「病理」という項目に代わって「病理診断科」が用いられることになった。

平成6年（1994年）に発足した将来構想委員会では日本病理学会の法人化の他に、日本病院病理医協会及び国際病理アカデミーとの関係は如何にあるべきか、についても検討が行われた。日本病院病理医協会の会員は全て日本病理学会の会員であり、病理認定医を日本病理学会が認定している現実を見ると、日本病院病理医協会が日本病理学会の内部機構に組み込まれることが日本の病理学の将来にとって必要であるとの結論に達した。平成12年（2000年）、小池盛雄日本病院病理医協会会長の時代に両者は一体化した。それに伴い日本病理学会に認定病理医部会が発足し、日本病院病理医協会の機関紙「病院病理」は17巻2号より「診断病理」として日本病理学会から発行されている。

一方、国際病理アカデミー日本支部については、その会員も全て日本病理学会の会員であるが、本部は米国にある国際学会であるため、日本病理学会と一体化するのは不可能であり、日本病理学会は独自に国際交流を行うべきであるとの結論に達した。将来構想委員会の結論に従い先ず、英国病理学会との交流が始まり、平成6年（1994年）の第40回日本病理学会秋期特別総会に英国シェフィールド大学のアンダーウッド（Underwood）教授を招聘し講演をお願いし、翌平成7年（1995年）にはオックスフォード大学での英国病理学会総会に日本から主として理事が数名参加し、さらに、その翌年には英国から主な病理医数名が東京で開催された第85回日本病理学会総会に出席した。また、独国病理学会との交流も始まり、平成10年（1998年）、イエーナで開催された独国病理学会総会に日本から数名の病理医が参加した。それ以後、日英及び日独の病理学会レベルでの交流が続いている。一方、アジアの国々との病理学会レベルの交流は日中国交正常化20周年を記念して1992年（平成4年）に日本医学界と中華医学界の交流が北京で行われ、日中の病理学会も参加し、日本病理学会から数名の会員が参加した。病理学の国際交流を目的とする国際病理アカデ

ミーと日本病理学会との関係はどうあるべきかについては、2000年（平成12年）に名古屋で開催された第23回国際病理アカデミー国際会議に象徴されていると思われる。日本病理学会が中心となって準備が行われ、会長は当時の日本病理学会理事長であった筆者が務めた。

その他の将来構想委員会の検討事項では、日本病理学会の活動をより活発なものにするために支部を置くべきであるとの結論に達し、評議員会の決議を経て、平成9年(1997年)に、北海道、東北（新潟県を含む）、関東（山梨県を含む）、中部（三重県を含む）、近畿、中国四国及び九州沖縄の7支部が設立された。また、これまでの名誉会員はその選考の基準が曖昧であるため、学会の健全な運営を行うために、平成9年に内規を制定し、その基準を満65歳に達した評議員歴25年以上の会費完納者を対象とし、名誉会員選任時に終身会費を納入することになった。

最近50年の日本病理学会の歩みを学会運営の面から概観すると上記の様なことになると思われるが、それでは我国の病理学という学問の内容が具体的にはどのように推移してきたかは大変興味ある点である。日本の病理学の始まりは1849年に緒方公裁（洪庵）が「病学通論」を出版した年であると考えられている。病学通論はいくつかのオランダ語の病理学書の他に、生理学、物理学、化学、内科学及び外科学の書物を参考にして洪庵が編纂したもので、その当時の訳書の多くが、一つの著書の翻訳ないし抄訳であったことから、注目すべき医学書と考えられる。しかし、病学通論の出版はウィルヒョウの「細胞病理学」の出版（1858年）より数年前であり、その内容は当時の学会を支配していた生力論的な思想に基づく液体病理学的色彩を帯びており、具体性に乏しいものであったとのことである。病理学はオランダ語ではZiektekunde（シーキテキュンデ）と呼ばれ、蘭学者の多くはその訳語として「原病学」、「原病論」を用いたが、「病理」、「病理論」という言葉も広く用いられていたとのことであり、緒方洪庵は「病学」という名称を用いたが、その後、この名称はあまり使われなくなり、明治10年（1878年）以降になり、「病理」ないし「病理学」という呼び方に落ち着いたとされている。

明治政府がドイツ医学を積極的に取り入れたため、病理学を志す多くの学者がドイツに留学した。ルドルフ・ウィルヒョウ（Rudolf Virchow）のもとでは、進藤二郎、三浦守治、山極勝三郎、佐多愛彦、藤浪 鑑などが学んだ。その後、ルードビッヒ・アショッフ（Lowdewig Aschoff）の教室に51名の多数の日本人学者が留学し、その内、田原 淳、長與又郎、川村麟也、緒方知三郎、清野謙次、三田村篤志郎、田部 浩、木下良順、馬杉復三、大島福造、浜崎幸雄、赤崎兼義など23名が病理学専攻者となった。その他、ロベルト・レスレー（Robert Rössle）のもとでは、今 裕、馬杉復三、浜崎幸雄、鈴木 遂、吉田富三などが学んだ。

この様に日本の病理学はドイツ病理学の伝統を受け継いで今日まで発展してきたが、第

二次世界大戦後は米国に留学した病理学者が多くなり、米国で発達した生検および手術症例の病理診断を中心とした病理学、所謂、外科病理学が盛んになった。ドイツ病理学の伝統は病理解剖を中心とした病理形態学であり、ひところ一世を風靡した Henke-Lubarsch の教科書は百科全書とも言うべきものであり、剖検から得られた膨大な人間の病気の病理形態学的所見を全ての文献を網羅して丁寧に記述されている。ドイツ病理学は剖検症例を基に疾患の本体と病理発生を研究する本格的病理学であり、ドイツ人の理想主義的なものの考え方が反映されていると思われる。一方、アメリカの所謂、外科病理学は極めて実用的な病理学であり、英米人のプラグマティズム的思考の産物ではないかと考えられる。今日の日本の病理学にはドイツ流の病理学 100 年とアメリカ流の病理学 60 年の伝統が車の両輪のように根付いたと感じられる。病理専門医及び病理診断科が公に認められるに至った今日の時代に生きる病理医は、医師としての責任を果たし、更に日常の病理診断業務で生じた問題を解決するために、病理学という学問に精進することが求められている。

表1 総会一覧

回	会 期	開催地	会長	副会長	会長所属
1	明治44年(1911) 4月4日～5日	東京	山極勝三郎	桂田富士郎	東京帝国大学
2	明治45年(1912) 4月4日～5日	東京	山極勝三郎	桂田富士郎	東京帝国大学
3	大正2年(1913) 4月4日～5日	京都	藤浪 鑑	長與 又郎	京都帝国大学
4	大正3年(1914) 4月2日～4日	東京	山極勝三郎	長與 又郎	東京帝国大学
5	大正4年(1915) 4月4日～6日	東京	山極勝三郎	長與 又郎	東京帝国大学
6	大正5年(1916) 4月4日～6日	東京	長與 又郎	今 裕	東京帝国大学
7	大正6年(1917) 4月4日～6日	東京	佐多 愛彦	今 裕	府立大阪医科大学
8	大正7年(1918) 4月2日～4日	東京	桂田富士郎	長與 又郎	岡山医学専門学校
9	大正8年(1919) 4月1日～3日	京都	藤浪 鑑	川村 麟也	京都帝国大学
10	大正9年(1920) 4月1日～3日	東京	田原 淳	草間 滋	九州帝国大学
11	大正10年(1921) 4月1日～3日	東京	長與 又郎	中村八太郎	東京帝国大学
12	大正11年(1922) 4月2日～4日	京都	速水 猛	角田 隆	京都帝国大学
13	大正12年(1923) 4月1日～3日	東京	草間 滋	福士 政一	慶應義塾大学
14	大正13年(1924) 4月4日～6日	大阪	佐多 愛彦	緒方知三郎	大阪医科大学
15	大正14年(1925) 7月11日～13日	札幌	今 裕	川上 漸	北海道帝国大学
16	大正15年(1926) 4月2日～4日	東京	長與 又郎	緒方知三郎	東京帝国大学
17	昭和2年(1927) 4月11日～13日	新潟	川村 麟也	村田 宮吉	新潟医学専門学校
18	昭和3年(1928) 4月1日～3日	東京	草間 滋	石橋 松藏	慶應義塾大学
19	昭和4年(1929) 4月1日～3日	仙台	木村 男也	片瀬 淡	東北帝国大学
20	昭和5年(1930) 4月2日～4日	大阪	村田 宮吉	三田村篤志郎	大阪帝国大学
21	昭和6年(1931) 4月5日～7日	京都	清野 謙次	田村 於兔	京都帝国大学
22	昭和7年(1932) 4月1日～3日	名古屋	林 直助	佐藤 清	愛知医科大学
23	昭和8年(1933) 4月5日～7日	福岡	田原 淳	竹内 清	九州帝国大学
24	昭和9年(1934) 4月2日～4日	東京	緒方知三郎	徳光 美福	東京帝国大学
25	昭和10年(1935) 4月1日～3日	金沢	中村八太郎	木村 哲二	金沢医学専門学校
26	昭和11年(1936) 4月5日～7日	京都	角田 隆	梅原 信正	京都府立医学校
27	昭和12年(1937) 4月3日～5日	東京	福士 政一	鈴木 遂	日本医科大学
28	昭和13年(1938) 4月2日～4日	京都	清野 謙次	那須省三郎	京都帝国大学
29	昭和14年(1939) 4月4日～6日	岡山	田村 於兔	田部 浩	岡山医科大学
30	昭和15年(1940) 4月4日～6日	千葉	石橋 松藏	馬杉 復三	千葉医科大学
31	昭和16年(1941) 4月6日～8日	大阪	片瀬 淡	木下 良順	大阪帝国大学
32	昭和17年(1942) 3月27日～28日	東京	木村 哲二	大島 福造	名古屋帝国大学
33	昭和18年(1943) 4月3日～5日	東京	三田村篤志郎	和気 巖	東京帝国大学
34	昭和19年(1944) 中止	(京都)	(梅原 信正)	(荒木 正哉)	
35	昭和21年(1946) 7月7日	東京	三田村篤志郎	佐々 一雄	東京帝国大学

表1 総会一覧 つづき

回	会 期	開催地	会長	副会長	会長所属
36	昭和 22 年 (1947) 4 月 5 日～ 6 日	大阪	木下 良順	鈴江 懐	大阪大学
37	昭和 23 年 (1948) 4 月 7 日～ 9 日	京都	森 茂樹	濱崎 幸雄	京都大学
38	昭和 24 年 (1949) 4 月 6 日～ 8 日	福岡	小野 興作	宮崎 吉夫	九州大学
39	昭和 25 年 (1950) 4 月 6 日～ 8 日	名古屋	大島 福造	江口 季雄	名古屋大学
40	昭和 26 年 (1951) 4 月 2 日～ 4 日	東京	岡 治道	青木 貞章	東京大学
41	昭和 27 年 (1952) 4 月 6 日～ 8 日	岡山	田部 浩	久保 久雄	京都大学
42	昭和 28 年 (1953) 4 月 5 日～ 7 日	仙台	那須省三郎	吉田 富三	東北大学
43	昭和 29 年 (1954) 4 月 7 日～ 9 日	熊本	久保 久雄	瀧澤延次郎	熊本大学
44	昭和 30 年 (1955) 4 月 2 日～ 5 日	京都	鈴江 懐	三宅 仁	京都大学
45	昭和 31 年 (1956) 7 月 12 日～ 14 日	札幌	安保 壽	新保幸太郎	弘前大学
46	昭和 32 年 (1957) 4 月 6 日～ 8 日	岡山	濱崎 幸雄	波多野輔久	岡山大学
47	昭和 33 年 (1958) 4 月 1 日～ 3 日	大阪	安田 竜夫	馬場 為義	大阪大学
48	昭和 34 年 (1959) 3 月 30 日～ 31 日	東京	瀧澤延次郎	三宅 仁	千葉大学
49	昭和 35 年 (1960) 5 月 12 日～ 14 日	新潟	伊藤 辰治	藤巻 茂夫	新潟大学
50	昭和 36 年 (1961) 4 月 1 日～ 4 日	東京	吉田 富三	三宅 仁	東京大学
51	昭和 37 年 (1962) 6 月 28 日～ 30 日	札幌	武田 勝男	小野江為則	北海道大学
52	昭和 38 年 (1963) 4 月 3 日～ 4 日	大阪	馬場 為義	宮地 徹	大阪市立大学
53	昭和 39 年 (1964) 5 月 4 日～ 6 日	仙台	赤崎 兼義	諏訪 紀夫	東北大学
54	昭和 40 年 (1965) 4 月 6 日～ 8 日	長崎	秋岡 茂	林 一郎	長崎大学
55	昭和 41 年 (1966) 4 月 27 日～ 29 日	広島	渡辺 漸	山田 明	広島大学
56	昭和 42 年 (1967) 4 月 5 日～ 6 日	名古屋	宮川 正澄	飯島 宗一	名古屋大学
57	昭和 43 年 (1968) 4 月 2 日～ 4 日	東京	三宅 仁	太田 邦夫	東京大学
58	昭和 44 年 (1969) 4 月 2 日～ 4 日	福岡	橋本美智雄	田中 健蔵	九州大学
59	昭和 45 年 (1970) 4 月 6 日～ 8 日	京都	岡本 耕造	翠川 修	京都大学
60	昭和 46 年 (1971) 4 月 3 日～ 4 日	東京	小林 忠義	影山 圭三	慶應義塾大学
61	昭和 47 年 (1972) 4 月 4 日～ 6 日	東京	太田 邦夫	島崎 徹郎	東京大学
62	昭和 48 年 (1973) 4 月 5 日～ 7 日	千葉	岡林 篤	井出源四郎	千葉大学
63	昭和 49 年 (1974) 4 月 3 日～ 5 日	名古屋	田内 久	牛島 宥	名古屋大学
64	昭和 50 年 (1975) 4 月 3 日～ 4 日	高槻	細川 修治	浜本 祐二	大阪医科大学
65	昭和 51 年 (1976) 5 月 20 日～ 22 日	仙台	諏訪 紀夫	笹野 伸昭	東北大学
66	昭和 52 年 (1977) 4 月 8 日～ 10 日	岡山	妹尾佐知丸	小川 勝士	岡山大学
67	昭和 53 年 (1978) 4 月 5 日～ 7 日	熊本	武内 忠男	林 秀夫	熊本大学
68	昭和 54 年 (1979) 4 月 1 日～ 2 日	東京	竹内 正	志方 俊夫	日本大学
69	昭和 55 年 (1980) 6 月 25 日～ 27 日	札幌	小野江為則	菊地 浩吉	札幌医科大学
70	昭和 56 年 (1981) 4 月 1 日～ 3 日	東京	影山 圭三	渡辺陽之輔	慶應義塾大学

表1 総会一覧 つづき

回	会 期	開催地	会長	副会長	会長所属
71	昭和 57 年 (1982) 4 月 6 日～ 8 日	東京	島峰 徹郎	森 亘	東京大学
72	昭和 58 年 (1983) 4 月 5 日～ 6 日	大阪	北村 旦	松本 圭史	大阪大学
73	昭和 59 年 (1984) 4 月 3 日～ 5 日	東京	石川 栄世	藍沢 茂雄	東京慈恵会医科大学
74	昭和 60 年 (1985) 4 月 17 日～ 19 日	東京	森 亘	浦野 順文	東京大学
75	昭和 61 年 (1986) 4 月 8 日～ 10 日	仙台	笹野 伸昭	京極 方久	東北大学
76	昭和 62 年 (1987) 3 月 31 日～ 4 月 1 日	東京	渡辺陽之輔	細田 泰弘	慶應義塾大学
77	昭和 63 年 (1988) 5 月 25 日～ 27 日	札幌	相沢 幹	小林 博	北海道大学
78	平成元年 (1989) 3 月 29 日～ 31 日	京都	花岡 正男	内野 文彌	京都大学
79	平成 2 年 (1990) 3 月 29 日～ 31 日	福岡	遠城寺宗知	菊池 昌弘	九州大学
80	平成 3 年 (1991) 4 月 3 日～ 4 日	大阪	松本 圭史	北村 幸彦	大阪大学
81	平成 4 年 (1992) 5 月 14 日～ 16 日	仙台	京極 方久	名倉 宏	東北大学
82	平成 5 年 (1993) 4 月 6 日～ 8 日	東京	下里 幸雄	廣橋 説雄	国立がんセンター
83	平成 6 年 (1994) 3 月 29 日～ 31 日	京都	藤田 哲也	芦原 司	京都府立医科大学
84	平成 7 年 (1995) 4 月 17 日～ 19 日	名古屋	浅井 淳平	松山 睦司	名古屋大学
85	平成 8 年 (1996) 4 月 23 日～ 25 日	東京	細田 泰弘	秦 順一	慶應義塾大学
86	平成 9 年 (1997) 6 月 3 日～ 6 日	札幌	菊地 浩吉	森 道夫	札幌医科大学
87	平成 10 年 (1998) 4 月 14 日～ 16 日	広島	田原 榮一	井内 康輝	広島大学
88	平成 11 年 (1999) 4 月 6 日～ 8 日	東京	町並 陸生	石川 隆俊	東京大学
89	平成 12 年 (2000) 4 月 11 日～ 13 日	大阪	北村 幸彦	青笹 克之	大阪大学
90	平成 13 年 (2001) 4 月 5 日～ 7 日	東京	秦 順一	岡田 保典	慶應義塾大学
91	平成 14 年 (2002) 3 月 26 日～ 28 日	横浜	森 茂郎	深山 正久	東京大学医科学研究所
92	平成 15 年 (2003) 4 月 23 日～ 25 日	福岡	恒吉 正澄	居石 克夫	九州大学
93	平成 16 年 (2004) 6 月 9 日～ 11 日	札幌	長嶋 和郎	吉木 敬	北海道大学
94	平成 17 年 (2005) 4 月 14 日～ 16 日	横浜	長村 義之	上山 義人	東海大学
95	平成 18 年 (2006) 4 月 30 日～ 5 月 2 日	東京	坂本 穆彦	藤岡 保範	杏林大学
96	平成 19 年 (2007) 3 月 13 日～ 15 日	大阪	青笹 克之	仲野 徹 寺田 信行	大阪大学
97	平成 20 年 (2008) 5 月 15 日～ 17 日	金沢	中沼 安二	大井 章史	金沢大学
98	平成 21 年 (2009) 5 月 1 日～ 3 日	京都	真鍋 俊明	鍋島 陽一 松田 道行	京都大学
99	平成 22 年 (2010) 4 月 27 日～ 29 日	東京	樋野 興夫	八尾 隆史	順天堂大学
100	平成 23 年 (2011) 4 月 28 日～ 30 日	横浜	深山 正久	宮園 浩平	東京大学

表2 会員数および演題数の推移（1962年-2010年）

	会員数	一般演題数
第51回 (1962年)	—	—
52 (1963年)	—	200
53 (1964年)	—	321
54 (1965年)	1,249	339
55 (1966年)	—	229
56 (1967年)	—	222
57 (1968年)	1,464	272
58 (1969年)	1,567	318
59 (1970年)	1,549	315
60 (1971年)	1,625	273
61 (1972年)	1,543	330
62 (1973年)	—	346
63 (1974年)	1,929	379
64 (1975年)	1,928	392
65 (1976年)	2,253	462
66 (1977年)	2,436	504
67 (1978年)	2,436	571
68 (1979年)	2,619	448
69 (1980年)	2,650	668
70 (1981年)	2,908	618
71 (1982年)	2,908	698
72 (1983年)	3,125	737
73 (1984年)	3,385	818
74 (1985年)	3,407	846
75 (1986年)	3,545	978
76 (1987年)	3,713	875
77 (1988年)	3,578	1,085
78 (1989年)	3,641	940
79 (1990年)	3,762	1,072
80 (1991年)	—	1,058
81 (1992年)	—	1,163
82 (1993年)	—	1,281
83 (1994年)	4,165	1,239
84 (1995年)	4,254	1,263
85 (1996年)	4,197	1,206
86 (1997年)	4,179	1,280
87 (1998年)	4,276	1,288
88 (1999年)	4,238	1,202
89 (2000年)	4,064	1,198
90 (2001年)	4,019	1,133
91 (2002年)	3,940	1,192
92 (2003年)	4,070	1,134
93 (2004年)	4,053	1,127
94 (2005年)	4,076	1,087
95 (2006年)	4,073	1,111
96 (2007年)	3,908	1,048
97 (2008年)	4,084	1,049
98 (2009年)	4,056	1,040
99 (2010年)	4,089	1,029
100 (2011年)	4,079	1,086

表3 宿題報告一覧

年	総会回	演者	演題
1962 (昭和37)	51 (札幌)	岡林 篤 藤巻 茂夫 新井 恒人 河瀬 収	感染と免疫 A 感染の免疫病理学的研究 感染と免疫 B 免疫とアレルギー - 膠原病の病理 動脈硬化症 A 動脈硬化症の病理 - 代謝障害からみた成り立ち, とくに初期像について 動脈硬化症 B 弾性線維の態度, 特に微細構造の変化について
1963 (昭和38)	52 (大阪)	嶋田 博 神部 誠一 家森 武夫 川合 貞夫	肺胞の構造と病理 - 光学顕微鏡並びに電子顕微鏡による研究 新産児の病理 炎症における食細胞の関与とその形態 脳腫瘍の実験的研究
1964 (昭和39)	53 (仙台)	太田 邦夫 高木 文一	胃癌の発生 細胞傷害の超微形態学
1965 (昭和40)	54 (長崎)	妹尾佐知丸 宮地 徹	細胞の分化 - 赤芽球の分化を中心として わが国の肝臓 - とくに肝硬変との関係について
1966 (昭和41)	55 (広島)	諏訪 紀夫 武内 忠男	肺の構造と機能, 特に肺気腫の換気力学について 酸素反応からみたグリコーゲン代謝の形態学的研究
1967 (昭和42)	56 (名古屋)	佐藤 春郎 林 秀男	癌転移, 腹水腫瘍の実験病理学的研究から 炎症 その発生と抑制の機構について
1968 (昭和43)	57 (東京)	小島 瑞 草野 信男	リンパ節の細胞病理学的研究 - 特に二次小節を中心として 蛍光抗体法による日本脳炎の研究
1969 (昭和44)	58 (福岡)	小野江為則 松本武四郎	肝臓の超微構造的病理学 脾腫の病理形態学 - とくにいわゆる B anti 脾を中心として
1970 (昭和45)	59 (京都)	北村 四郎 大根田玄寿 岡野 錦弥	形態学よりみた炎症のメカニズム 脳出血の病理 - 血管病変を中心として 病理学的表現の客観化, 殊に人体白血病とその周辺について
1971 (昭和46)	60 (東京)	大高 祐一 花岡 正男	結合組織病の病理 - リウマチを中心として γ M抗体産生機構の免疫病理学的研究 - とくに虫垂との関連について
1972 (昭和47)	61 (東京)	細川 修治 斎藤 守	不明 不明
1973 (昭和48)	62 (千葉)	西塚 泰章 影山 圭三 相沢 幹	胸腺機能の実験的研究 - 周生期病理学の立場から 肺腺維症のなりたち 移植と移植免疫
1974 (昭和49)	63 (名古屋)	山田 明 竹内 正 武田 進	職業性毒ガス中毒の病理解剖学的研究 - 特に呼吸器癌の発生について - 腎内血管攣縮の形態学と腎内血行動態 紫外線DNA損傷と修復に関する細胞病理学的研究
1975 (昭和50)	64 (高槻)	梶川欽一郎 笹野 伸昭	細胞間マトリックスの病理 副腎皮質内分泌環境の機能病理学
1976 (昭和51)	65 (仙台)	島峰 徹郎 長与 健夫	慢性骨髄不全の病理 胃癌発生に関する組織学的及び実験的研究

表3 宿題報告一覧 つづき

年	総会回	演者	演題
1977 (昭和52)	66 (岡山)	石川 栄世 田中 健蔵 濱島 義博	腎盂・腎炎の病理 線浴現象の病理学的研究 川崎病
1978 (昭和53)	67 (熊本)	小林 博 那須 毅 米沢 猛	異物化 膜(形成)性脂質異常症 membranous lipodystrophy の病理 脱髄疾患と脱髄機構
1979 (昭和54)	68 (東京)	渡辺陽之輔 小川 勝士	ヒト好中球および白血球細胞の微細構造 アデノウイルス12型誘発腫瘍 - とくに実験脳腫瘍へのア プローチ -
1980 (昭和55)	69 (札幌)	飯島 宗一 菅野 晴夫 塚田 英之	生体防禦機構の器官化 - 脾臓を中心として - 人癌の自然史 ペルオキシゾームの病理学的研究
1981 (昭和56)	70 (東京)	青山 友三 森 亘 藤田 哲哉	ヘルペス群ウイルスによる感染症の病理学的研究 劇症肝疾患 細胞動態からみた胃癌の発生と進展
1982 (昭和57)	71 (東京)	松本 圭史 志方 俊夫 遠城寺宗知	性ホルモン依存性腫瘍 ウイルス性肝炎 - その感染と発症 - 軟部肉腫および肉腫様病変の組織形態学
1983 (昭和58)	72 (大阪)	下里 幸雄 菊地 浩吉	肺癌 - その組織発生, 分化, 予後因子について - リンパ球表面抗原の解析
1984 (昭和59)	73 (東京)	畠山 茂 杉山 武敏 横路謙次郎	ヒト睾丸萎縮の病理 癌と染色体異常 - 実験白血病の研究から - 白血病の発生と進展に関する実験的研究
1985 (昭和60)	74 (東京)	京極 方久 玉置 憲一 奥平 雅彦	免疫病の病理 - 組織傷害と慢性化機構の解析 - ヌードマウス移植人癌の病理 - 担癌個体の病理学への実 験的アプローチ - Opportunistic Fungus Infection の病理
1986 (昭和61)	75 (仙台)	伊東 信行 渡辺 慶一 井川 洋二	膀胱癌 - 発生と進展並びにその修飾 - 脂質過酸化と細胞傷害: その調節機構としてのグルタチ オンペルオキシダーゼの意義 レトロウイルスによる白血病発生の機構: 腫瘍化関連遺 伝子とその標的細胞における発現
1987 (昭和62)	76 (東京)	土山 秀夫 吉永 秀	腫瘍と過形成の病理 - 副腎皮質を場として - 炎症による免疫応答の増幅機構とその意義
1988 (昭和63)	77 (札幌)	林 裕造 中村 恭一 家森 幸男	環境化学物質による発癌の病理 - 癌一次予防の病理学的 基礎 - 大腸癌の構造: 異型度係数から導かれる大腸癌の組織発 生とその発育進展 循環器疾患の予知・予防病理学
1989 (平成元)	78 (京都)	須知 泰山 北村 幸彦	T細胞リンパ腫 - 多様性とその生物学的背景 - マスト細胞. 起源, 分化, 機能
1990 (平成2)	79 (福岡)	北川 知行 竹田 俊男 若狭 治毅	肝癌の発生 老化促進モデルマウス (SAM) の開発 Bリンパ腫 - 組織発生, 増殖および進展

表3 宿題報告一覧 つづき

年	総会回	演者	演題
1991 (平成3)	80 (大阪)	森 道夫 生田 房弘	細胞骨格の機能病理学 - 肝臓を中心として - 脳病巣の修復とアストロサイト
1992 (平成4)	81 (仙台)	田原 榮一 板倉 照好 白井 俊一	ヒト胃癌の発生・増殖・進展 - 分子病理学的アプローチ 病理学における細胞間相互作用 - その分子機構の解析 全身性エリテマトーデスの病理
1993 (平成5)	82 (東京)	細田 泰弘 小西 陽一 高橋 潔	肺高血圧症 - その人体病理と実験病理の一断面 - 膝癌の発生 マクロファージの発生, 分化と機能
1994 (平成6)	83 (京都)	渡辺 英伸 池原 進 石川 隆俊	早期胆嚢癌の病理 難病の病因 DNA修復と発癌
1995 (平成7)	84 (名古屋)	今井 大 片桐 一 岡田 茂	濾胞樹状細胞の形態・機能・病態 HLAと疾患 活性酸素による組織障害と発がん - 鉄依存性腎発がんモデルを中心として -
1996 (平成8)	85 (東京)	日合 弘 廣橋 説雄 町並 陸生	リンパ腫の遺伝的感受性の実験的研究 ヒトがんの多段階発生と組織学的多様性の分子機構 骨・関節腫瘍の病理
1997 (平成9)	86 (札幌)	吉木 敬 矢谷 隆一 遠藤 雄三	ヒトレトロウイルス感染の病理 ヒト前立腺癌の発生と進展 - 地理病理学的・分子病理学的アプローチ IgA腎症の成因
1998 (平成10)	87 (広島)	福島 昭治 秦 順一 森 茂郎	環境因子の発癌リスク - 評価と予防への実験病理学的アプローチ - 胎児性腫瘍の病理 - 細胞分化, 器官形成の分子基盤 - びまん性大細胞型リンパ腫の病理
1999 (平成11)	88	林 良夫 神代 正道 長嶋 和郎	シェーグレン症候群の病理 肝細胞癌の病理; 特に形態発生と進展について ウイルス性脳症の発生機序
2000 (平成12)	89 (大阪)	広川 勝彦 能勢 真人 恒吉 正澄	老化とストレスと免疫機能 膠原病の病像多様性の起源 軟部肉腫の病理
2001 (平成13)	90 (東京)	青笹 克之 名倉 宏 高橋 雅英	慢性炎症を基盤に発生する悪性リンパ腫 消化管粘膜における生体防御機構と粘膜障害 RET癌原遺伝子の病理学
2002 (平成14)	91 (横浜)	立松 正衛 樋野 興夫 岡田 保典	胃癌の発生・進展・修飾要因 癌性化境遇 - 炎症による肝癌と遺伝による人癌に学ぶ - 細胞外マトリックス代謝の病理
2003 (平成15)	92 (福岡)	津田 洋行 長村 義之 居石 克夫	がん遺伝子トランスジェニックラットを用いた発がん研究 下垂体細胞および下垂体腺腫の機能分化の分子機構 - 転写因子を中心として - 血管リモデリングの病理 - 血管内皮細胞の機能からみた病態解析と臨床研究への応用 -

表3 宿題報告一覧 つづき

年	総会回	演者	演題
2004 (平成16)	93 (札幌)	森 秀樹 中沼 安二 筒井 祥博	大腸がんの発生と予防 肝内胆管がんの病理-原発性胆汁性肝硬変(PBC)を中心に- サイトメガロウイルス感染症における神経原発性の発生機序
2005 (平成17)	94 (横浜)	小野江和則 小川 勝洋 山口 朗	T細胞免疫系の成立と生体内役割 実験肝発癌の分子病理-初期変化を中心に- 骨芽細胞の分化調節機構の解析:骨疾患の成因,病態の解析と治療法の開発に向けた基盤研究
2006 (平成18)	95 (東京)	落合 淳志 追手 巍 山本 哲郎	がん微小環境と浸潤・転移機構-臓器特異がん転移機構解明と治療法開発の試み- 糸球体腎炎:発症・進展そして糸球体硬化 貧食白血球の浸潤諸パターンを担う新規の白血球走化因子について
2007 (平成19)	96 (大阪)	白井 智之 内藤 眞 高松 徹郎	前立腺癌の発生・進展とその予防に関する基礎的研究 マクロファージの分化・機能制御機構と疾患 不整脈源性基質を求めて-バイオフィトニクスを用いた心臓病理学-
2008 (平成20)	97 (金沢)	安井 弥 佐藤 昇志 岩崎 宏	胃がんの Transcriptome dissection -組織からのシーズの発見とその診断・治療への展開- ヒトがん免疫制御の分子病理学的基盤 軟部腫瘍の病態-日常の診断から実験的探索へ-
2009 (平成21)	98 (京都)	笹野 公伸 深山 正久 笹栗 靖之	Endocrinology から Intracrinology へ -ヒト乳癌局所でのエストロゲン合成とその作用- 感染症と癌-Epstein Barr ウイルス関連胃癌の病理 ヒスタミンによるコレステロール・胆汁酸代謝調節と動脈硬化への関与
2010 (平成22)	99 (東京)	張ヶ谷健一 米澤 傑 上出 利光	病態解析に向けた細胞-細胞,細胞-基質間相互作用の研究- Mam, CD44, ヒアルロンサンの解析- ムチン:ヒト癌における臨床病理学的意義と遺伝子発現機構の解明から腫瘍悪性度早期診断システムの構築まで 組織微小環境の内的調節因子,オステオポンチンの病態病理学
2011 (平成23)	100 (横浜)	岡安 勲 宮園 浩平	潰瘍性大腸炎の発症・持続とその大腸発癌・進展機序: 慢性臓器炎-発癌系のモデルとして がんの浸潤・転移のシグナルネットワーク

表4 秋期特別総会一覧

回	会 期	開催地	代表世話人	世話人	世話人所属
1	昭和30年(1955)11月11～12日	東京	吉田 富三	三宅 仁	東京大学
2	昭和31年(1956)11月16～17日	東京	青木 貞章	小林 忠義	慶應義塾大学
3	昭和32年(1957)11月16～17日	東京	大場 勝利	高木 文一	東京慈恵会医科大学
4	昭和33年(1958)11月6～7日	東京	吉田 富三	三宅 仁	東京大学
5	昭和34年(1959)11月4～5日	東京	武藤 幸治	太田 邦夫 石川 梧郎	東京医科歯科大学
6	昭和35年(1960)11月11～12日	東京	西井 烈	嶋田 博	東邦大学
7	昭和36年(1961)11月9～10日	東京	水野 礼司	大高 裕一	東京医科大学
8	昭和37年(1962)11月9～10日	東京	竹内 正	馬場 正郎	日本大学
9	昭和38年(1963)11月7～8日	東京	三宅 仁	太田 邦夫	東京大学
10	昭和39年(1964)11月12～13日	東京	小林 忠義	影山 圭三	慶應義塾大学
11	昭和40年(1965)11月1～2日	東京	渡辺 五郎	平福 一郎	昭和大学
12	昭和41年(1966)11月4～5日	東京	石川 栄世	松本武四郎	東京慈恵会医科大学
13	昭和42年(1967)11月9～10日	東京	今井 三喜	梶田 昭	東京女子医科大学
14	昭和43年(1968)10月29～30日	東京	橋本 敬祐	福田 芳郎	順天堂大学
15	昭和44年(1969)11月4～5日	東京	矢島 権八	福士 勝成	日本医科大学
16	昭和45年(1970)11月5～6日	東京	嶋田 博	福永 昇	東邦大学
17	昭和46年(1971)11月5～6日	東京	石井善一郎	森 巨 石川 梧朗 秋吉 正豊	東京医科歯科大学
18	昭和47年(1972)11月6～7日	東京	竹内 正	浜島 義博	日本大学
19	昭和48年(1973)11月12～13日	東京	大高 裕一	佐々 弘	東京医科大学
20	昭和49年(1974)11月14～15日	東京	松本武四郎	石川 栄世	東京慈恵会医科大学
21	昭和50年(1975)11月5～6日	東京	田代 浩二		昭和大学
22	昭和51年(1976)11月9～10日	東京	島峰 徹郎	森 巨	東京大学
23	昭和52年(1977)11月8～9日	東京	影山 圭三	渡辺陽之輔	慶應義塾大学
24	昭和53年(1978)11月8～9日	東京	橋本 敬祐	福田 芳郎	順天堂大学
25	昭和54年(1979)10月30～31日	東京	今井 三喜	梶田 昭	東京女子医科大学
26	昭和55年(1980)11月18～19日	東京	矢島 権八	福士 勝成 馬杉 洋三	日本医科大学
27	昭和56年(1981)10月27～28日	東京	菅野 晴夫	高山 昭三	癌研究会癌研究所
28	昭和57年(1982)11月5～6日	東京	福永 昇	川村 貞夫	東邦大学
29	昭和58年(1983)11月1～2日	東京	下里 幸雄		国立がんセンター
30	昭和59年(1984)11月7～8日	東京	畠山 茂	春日 孟	東京医科歯科大学
31	昭和60年(1985)11月11～12日	東京	志方 俊夫	櫻井 勇	日本大学
32	昭和61年(1986)11月5～6日	東京	石河 利隆		関東通信病院

表4 秋期特別総会一覧 つづき

回	会 期	開催地	代表世話人 / 会長	世話人 / 副会長	世話人所属
33	昭和 62 年 (1987) 11 月 25 ~ 26 日	東京	藍沢 茂雄	牛込新一郎	東京慈恵会医科大学
34	昭和 63 年 (1988) 11 月 15 ~ 16 日	東京	福田 芳郎	白井 俊一	順天堂大学
35	平成元年 (1989) 11 月 7 ~ 8 日	東京	渡辺陽之輔	坂口 弘 細田 泰弘	慶応大学
36	平成 2 年 (1990) 11 月 14 ~ 15 日	横浜	三杉 和章	蟹澤 成好	横浜市立大学
37	平成 3 年 (1991) 11 月 6 ~ 7 日	東京	町並 陸生	石川 隆俊	東京大学
38	平成 4 年 (1992) 11 月 17 ~ 18 日	東京	嶋田 裕之	海老原善郎	東京医科大学
39	平成 5 年 (1993) 11 月 17 ~ 18 日	東京	神田実喜男	風間 和男	昭和大学
40	平成 6 年 (1994) 11 月 16 ~ 17 日	東京	浅野 伍朗	山中 宣昭	日本医科大学
41	平成 7 年 (1995) 11 月 16 ~ 17 日	東京	玉置 憲一	渡辺 慶一 長村 義之	東海大学
42	平成 8 年 (1996) 11 月 7 ~ 8 日	沖縄	岩政 輝男	伊藤 悦男	琉球大学
43	平成 9 年 (1997) 11 月 12 ~ 13 日	東京	原 満	遠藤 雄三	虎の門病院
44	平成 10 年 (1998) 11 月 18 ~ 19 日	奈良	小西 陽一	日浅 義雄 市島 國雄	奈良県立医科大学
45	平成 11 年 (1999) 11 月 18 ~ 19 日	東京	中村 恭一	桶田 理喜 神山 隆一 高木 実 広川 勝昱	東京医科歯科大学
46	平成 12 年 (2000) 11 月 30 ~ 12 月 1 日	仙台	名倉 宏	堀井 明 笹野 公伸	東北大学
47	平成 13 年 (2001) 11 月 27 ~ 28 日	東京	白井 俊一	須田 耕一 広瀬 幸子	順天堂大学
48	平成 14 年 (2002) 11 月 14 ~ 15 日	岡山	赤木 忠厚	岡田 茂	岡山大学
49	平成 15 年 (2003) 11 月 20 ~ 21 日	東京	加藤 洋	坂元 吾偉	癌研究会癌研究所
50	平成 16 年 (2004) 12 月 2 ~ 3 日	名古屋	栄本 忠昭	白井 智之	名古屋市立大学
51	平成 17 年 (2005) 11 月 17 ~ 18 日	東京	深山 正久	宮園 浩平	東京大学
52	平成 18 年 (2006) 11 月 23 ~ 24 日	和歌山	覚道 健一	村垣 泰光	和歌山県立医科大学
53	平成 19 年 (2007) 12 月 6 ~ 7 日	東京	向井 清		東京医科大学
54	平成 20 年 (2008) 11 月 20 ~ 21 日	松山	植田 規史 能勢 真人		愛媛大学
55	平成 21 年 (2009) 11 月 19 ~ 20 日	東京	松原 修	河合 俊明 玉井 誠一	防衛医科大学校
56	平成 22 年 (2010) 11 月 25 ~ 26 日	北九州	橋本 洋		産業医科大学

表5 歴代幹事および法人化による理事長および副理事長

第50回	(1961年)	総務 吉田富三, 会計 滝沢延二郎, 編集 三宅 仁
51	(1962年)	同上
52	(1963年)	総務 三宅 仁, 会計 滝沢延二郎, 編集 太田邦夫
53	(1964年)	同上
54	(1965年)	同上
55	(1966年)	同上
56	(1967年)	同上
57	(1968年)	総務 太田邦夫, 会計 影山圭三, 編集 石川栄世
58	(1969年)	同上
59	(1970年)	同上
60	(1971年)	同上
61	(1972年)	同上
62	(1973年)	総務 島峰徹郎, 会計 影山圭三, 編集 石川栄世
63	(1974年)	同上
64	(1975年)	同上
65	(1976年)	同上
66	(1977年)	同上
67	(1978年)	同上
68	(1979年)	同上
69	(1980年)	同上
70	(1981年)	同上
71	(1982年)	同上
72	(1983年)	総務 森 亘, 会計 渡辺陽之輔, 編集 石川栄世
73	(1984年)	同上
74	(1985年)	同上
75	(1986年)	同上
76	(1987年)	総務 森 亘, 会計 渡辺陽之輔, 編集 下里幸雄
77	(1988年)	同上
78	(1989年)	総務 町並陸生, 会計 細田泰弘, 編集 下里幸雄
79	(1990年)	同上
80	(1991年)	同上
81	(1992年)	同上
82	(1993年)	同上
83	(1994年)	同上
84	(1995年)	総務 町並陸生, 会計 秦 順一, 編集 森 茂郎
85	(1996年)	同上
86	(1997年)	理事長 町並陸生, 副理事長 秦 順一, 副理事長 森 茂郎
87	(1998年)	同上
88	(1999年)	同上
89	(2000年)	理事長 秦 順一, 副理事長 森 茂郎, 副理事長 小池盛雄
90	(2001年)	同上
91	(2002年)	理事長 森 茂郎, 副理事長 坂本穆彦, 副理事長 長村義之
92	(2003年)	理事長 森 茂郎, 副理事長 長村義之, 副理事長 廣橋説雄
93	(2004年)	理事長 森 茂郎, 副理事長 坂本穆彦, 副理事長 長村義之
94	(2005年)	同上
95	(2006年)	理事長 長村義之, 副理事長 岡田保典, 副理事長 深山正久
96	(2007年)	同上
97	(2008年)	同上
98	(2009年)	同上
99	(2010年)	理事長 青笹克之, 副理事長 向井 清, 副理事長 寺田信行



最近50年で特記すべきこと

長村 義之

最近50年の日本病理学会の歩みを考える際に、数多くの重要事項があると思われるが、その一つとして特記すべきは、学会内のみならず行政面での病理診断の充実といえる。年次別に、以下の点があげられる。

1. 病理専門医制度
2. 社団法人化
3. 診療標榜科「病理診断科」
4. 診療報酬 第13部「病理診断」

病理専門医制度が発足したのは昭和53年(1978)で、いまから30年以上にもなる。

私が米国での病理研修(レジデントとフェロー)を終えて帰国したのが昭和50年であり、まさに専門医制度の議論がまとまりつつある時であった。当時私も委員会に呼んでいただき、米国の病理研修・認定制度の在り方をお話しした記憶がある。米国では、研修制度の整備が早くからなされ、American Board of Pathology (ABP) が試験と、病理専門医の認定を行っている。我が国でも当初から5年間の病理研修(臨床経験1年を含む)を義務化した。米国では、その後サブスペシャリティの認定もおこない、最近では Molecular Pathology (分子病理) の認定も始まっている。我が国でも、専門認定に病理診断の新しい流れを取り入れてゆく必要があると思われる。

我が国の医学において、病理学は長い間基礎医学として位置づけられており、当初その医療面(診療面)での活動はあまり体系だっで行われていなかった。厚労省での医事課長通達として“病理診断は医行為”であること

が認められたのは、平成元年(1989)であった。病理診断として画期的なステップであったが、この時点で、病理診断は医療施設で行うべきとなった。

病理学会として更なる大きな飛躍は社団法人化といえる。病理学会が社会的に見て、任意団体から“人格のある”団体として活動するために、所轄省庁を文部科学省として平成11年(1999)に社団法人となった。また厚生労働省は、法人化した会員1,000名以上の団体で、医師が会員の80%以上の学会の専門医を広告することを認めた。そこで病理学会も約2,000名の病理専門医の名前を公示した。これは、その後の病理診断科の標榜に結びつくものとして意義深いものと認識している。

日本病理学会最近50年の歩みを語る際に、ごく直近に達成したステップとして特記すべきは平成20年(2008)の診療標榜科「病理診断科」と診療報酬での第13部「病理診断」である。

これによって、医療行為として病理診断を行っている病院では「病理診断科」が広告され、市民も病理医が勤務している病院を知ることが出来るようになった。また、患者が病院で医療費の清算をする際にその領収書に「病理診断料」など病理診断に関わる項目が明記されるようになった。病理学会は、100周年を機に「国民が、より高度な医療の恩恵を受けられるよう」更なる研鑽をして行くことが望まれる。

病理学会のロゴマーク

100周年記念誌刊行委員会

病理学会のロゴマークは1980年、病理学会70周年記念の諸事業の一環として制定されました。最初のマークは、今のものとほとんど同じ体裁で、古い顕微鏡の絵を中心にして、そこに病理という篆書体の文字と Japanese Pathological Society という英文字が入れこんでありました。

現在のロゴマークの顕微鏡は、ロバートフックの原図を参考にして株式会社「スタジオR」の星野登志子氏によってイラスト化されました。発注者は学会幹事会（島峰、影山、石川幹事）でした。

スタジオRはNHK教育テレビのイラスト

などを仕事にしていた会社で、そこの社長であった岡田嘉秀氏が、当時の病理学会会計幹事で第70回総会長をされた影山圭三教授と同郷で、影山教授のテレビ出演のイラストを担当された関係もあったことから発注がなされたとのことでした。

この顕微鏡の絵をいれるということは幹事会の強い要望であったとのこと。星野さんは複数の案を作成し、幹事会がそのうちの一点を選択して決定となりました。その後病理学会の英文呼称が Japanese Society of Pathology とかわったことに伴い、この部分に変更されて今日に至っています

